
ちびっ子士郎の聖杯戦争。

雷雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちびっ子土郎の聖杯戦争。

【Z-コード】

Z5059P

【作者名】

雷雨

【あらすじ】

「おねえさん……だれ？」

最強のサーヴァント・セイバーを召喚したのは衛宮士郎……なのだが、何故か心身共に幼児化してしまった！笑いあり、ボケあり、たまーに怖いこともあります。一人の子供から始つたゆるーいハードフルコメディーな聖杯戦争が始るよ。

基本ほのぼのの趣味まつじぐらの小説になります。

ご感想をいただいた際、返信がおおいに遅れる場合があります、
ご了承お願いします。

序言（前書き）

前に投稿した、「ちびっ子土郎の聖杯戦争。（嘘予告）」を消去しここにせましたのです。

「おねえさん……だれっ？」

「えと、私のマスター……でいいんですね？」

「また？それ、何？」

月明りの下、彼は銀色の鎧の少女は田の前で首を傾げて共に混乱した。

「まさか、衛宮君がマスターだな……あれっ？」

「赤いおねえさん、だれっ？」

「シロウ、あれは敵ですよ。」

「でき？」

赤い少女と赤い騎士と直面し。

「何らかの誤差で、その……多分、私のせいです。」

「うう？赤いおねえさん、ワルい」としたのか？

「どうせ、その様ですね。」

全ては赤い少女が行つたことから始まり。

「アーチャン?」

「ぶつー」

「…………アーチャーだ。」

笑いあり。

「喜ぶがいい。お前の望みは漸く叶う。」

「え、それってじいさんがジャンクフードたべるのやめてくれるの?
?」

「…………それとは違う、気がする。」

ボケがあり。

「あれ、お兄ちゃんがちつちつくなつてゐる……?」

「うわあ、セイバー、おつきな人がいるよつー」

「シロウ、あればバーサーカーです!」

口リが出たり。

「ちつこい先輩、ちつこい先輩、ちつこい先輩、ちつこい先輩……」

「セイバー、あのおねえさんこわいつー」

たまに怖いこともあります。

「……ボクがコレ着てくれたら……考えてあげる。」

「それ着たら、いいの？」

「士郎ダメよ！あれば女物よ！」

「コスプレもあり。（！？）

一人の子供から始めたハードフルコメディーな聖杯戦争が始るよ。

誰得？

俺得つ！

はじまり。（前書き）

この小説には無垢100%の士郎さんがメインです、大きい高校生の士郎さんは出ません。

今回はちょいシリアスです。

はじまつ。

何故こんな場所に居るか、わからず赤毛の少年は首を傾げた。
見覚えのない建物の中で倒れていた身体を起こす、胸の真ん中から
身体中が痛く、小さく呻く。

「……ひ、

暫くしてからペタンと尻をついて座り込むと、辺りを見回す。

月明りで照らされた長い廊下に沢山の横に開くドアと反対に沢山の
窓……学校?と首を傾げるが何故此所に居るかまったくわからない、
それに明らかに身体に合わないベージュ色の上下の服に中に真ん中
が赤く染まつたて穴が空いた青と白のシャツ。

「……?

頭が痛い、吐気がする。

無理に立ち上がると眩暈でまた座り込んでしまつた。
ピチャ、と跳ねる音に真下を見て見る……

「!?

血だ。

真つ赤な血溜まりで座り込む自分に慌てて壁側に張り付く。
シン、と静まりかえつた長い廊下に荒い息遣いが響き恐怖心で震える
身体、膝に顔を埋め頭を抱え目を瞑つて蹲る。

なんで?

「…………」

わからない。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い……

『…………』

「…………」

抱えていた頭を上げた、脳裏に写った黒髪の男が優しく笑っていた。

「…………、さん」

痛む身体を引きずりながら、近くにあつた掃除用具で汚れを落とし身に着けていた服（ズボンや靴）を手に学校を出た。

校門から出ると引きずる様に脚を進める。

此所はどこだか少年にはわからなかつた、だが足は勝手に動き続ける。

暫くすると、月明りに照らされた見慣れた道に出た。

家が近い。

優しく笑う男に手をひかれて着いた、一人で住むには広すぎる屋敷。

もうすぐだ。

知らずに足を急がせる。

見えた。

やつと辿り着いた。

安堵し門をくぐつたが、あんなに急いでいた足は止まり……違和感を覚える。

屋敷には明かりがついていない。

いや、人の気配がしない。

玄関の戸を開けて、汚れた裸足のまま屋敷に入る。

居間を覗く、いない。

洗面所、いない。

あの人の部屋、いない。

部屋一つ一つを覗くが何処にもいなく、屋敷中を歩き周る。

庭に出て道場も見たが、あの人はいない。

最後に残つたのは土蔵。

重たい扉を開け、月明りに照らされた中を見回したが……やはり、探している人は見つからない。

物静かな屋敷、自分を救ってくれた人がいない。

「じ……ん」

ボロボロ涙が溢れ座り込むと少年は泣き出した。
悲しくて、哀しくて……ずっと無我夢中で男を呼びながら泣き続けるなか屋敷中に鳴り響く警戒音に少年は気がつかなかつた。

ジャリ、

「一」

背後、ちょうど少年の真後ろに感じた気配に振り返つた。
そこには、青い鎧に赤い槍を肩に担いだ男が立つていた。

「つかしなあ、確かに坊主の気配を辿つたはずなんだが……」

男はなんでだあ、と辺りを見回す。

少年には何がなんだか分からなかつた。

誰もいない屋敷に謎の男。

少年はギュッと大き過ぎる服の胸元を握ると後ずさる。

「あー……」

男はガシガシと頭を搔くと、土蔵の中に脚を踏み込む。

「悪いな、見られちまつたモンは仕方がねえ……これも運命だと思つて諦めてくれ。」

槍の穂先が胸元に当てる。

そこから先は、死。

なんで。

なんで。

少年は顔を歪めるとボロボロ泣き出す。

「悪い、苦痛なんだ感じないよ」いつ済ませるからな……」

男は少し眉をひそめ、穂先が服を貫いた。

しにたくない、しにたくない、しにたくない……！

あのヒトにたすけられたイノチなのに、ijiドシにたくない……！

だれか、たすけて……！

刹那、少年の心の叫びに呼応したのか床に描かれていた魔法陣が光る、男は瞬時に少年から離れる。

「まさか、小僧が七人目だと………？」

驚愕している男は舌打ちをすると土蔵から外に出ていった。

少年は、今日の辺りにしている光景に呆然としていた。

眩い光が止み目を開けると目の前に立つ、月明りに照らされた青いドレスに銀色の鎧を纏つた金髪に碧色の瞳をした物語に出て来る様な騎士の姿をした少女が自分を見下ろしている。

「問おう、貴方が私のマスターですか？」

凛とした声で問われた質問に少年は首を傾げる。

「おねえさん……だれっ？」

これが、少年のこれから始める物語の始まりだった。

はじまつ。（後書き）

出来た！！

突発でできたネタがまさかの好評だったので連載をしてみようと思
もいます。

投稿はまばらなので「」を承お願いします。

こうしたらいづだ、等の「」意見ありましたら是非。

キャラはオールの予定です。

おねえさんは、おれのセーバーさん。

「おねえさん……だれっ？」

最優のサーヴァントであるセイバーは目の前で首を傾げる赤毛の少年を目の前に混乱していた。

サーヴァントを召喚する者は魔術師だが、目の前にいる少年からは微弱な魔力を感じるが魔術師には程遠い一般人に近い。

「えーと、私のマスター……でいいんですね？」

「ますたー？ それ、何？」

舌足らずで首を傾げる少年にセイバーは頭を悩ませた。回りを見回すが少年以外誰もいない。

だが、背後……土蔵の外に魔力を感じ気を持ち直した

「マスターはここにつ！」

「え、あ……」

少年を背にセイバーは土蔵を出た。

少年には何がなんだかわからなかつた。

やつと見知った家に着いたのに、あの人は居なく、知らない男の人

に突然現れますたーではないかと訪ねてきた女の人……

あ、ケーサツ呼ばなきや、ふほーしんにゅうだつけ？ とぼん
やり考えていたが庭の方から金属音になんだろうと扉まで足を進め、
コツソリと覗き込むと目を奪われた。

さつきの男と少女が戦っている。

男は赤い槍で戦っているが少女は何か握っているようだが何かはわからない。

若干だが少女の方が押されている。

「あ、……」

少年は身を隠していた扉から外に出て駆け出した。

「だめえ！」

少年の叫びに男と少女は動きを止め、その間に少年が割って入った。突然の出来事に二人は固まってしまい少年を見下ろした。

「小僧……？」

「マスター！？ いけません、何処かに隠れて」

「ケンカはだめっ！」

「「……つは？」」

涙目で叫ぶように発した言葉に一人は目を点にした。

「ケンカしちゃだめだよ！ ケンカなんかしても痛いだけだし、なにより人を傷つけるんだよ……青いお兄さんも、いいおとなが、おねえさんみたいな女人の人を相手にケンカするなんてなきれないよっ！ おとなげないよっ！」

「「……」」

男は言われ放題言われ顔が引き攣る。

「あー、坊主。これはケンカじやねえ、サーヴァント同士の戦いだ」「さーばんと？たたかい？」
「そうだ、坊主もマスターならそれぐらいわかるだろ？」「……おれ、よくわかんない……でも、たたかうつてことはケンカなんだろ？」
「いや、戦いはケンカってわけじゃ……あつー……シケタ」「え、青いお兄さんかえるの？ふほーしんにゅうしたから？」「ふほー……セイバー、ここつお前とのマスターだよな」「そうなります……」

頭を抱えるセイバーとそれに首を傾げる少年

「今日は引かせてもうひげ、これ以上いたらお前んとのマスターに何言われるかわからんねえし」

相手の返信も聞かぬ内に男は堀を乗り越えて何処かに走り去つていった。

少女は待てと言いかけたが既に相手は去つてしまい、少女と少年が残された。

「あ、あの……」

恐る恐ると口を開き困ったように見上げてくる少年にセイバーは田線を合わせてじりじりしました、と尋ねれば少年はシュンとしてしまつ

……

「もしかしたら、おれじやました……？」

幻覚か垂れた犬耳が見えたがいやいやと頭を振った。

「そんなことはありませんよ、貴方のおかげでランサーを追い出せました。」

「ランサーーん？」

「ランサー、ですよ。さて、氣を取り直して……」

「ふえ？」

「再度問います、貴方が私のマスターですか？」

「……おねえさん、おれおねえさんの言つてこひるごとよくわからないよ、ますたーつてなにっ？」

「……手を、見せてください。」

手を、と首を傾げるが両手を見せると少年はあれ、と見慣れないものが自分の左の手の甲に浮かび上がる赤い刺青のよつな痕にアワアワと荒てた。

「おねえさん、なにこれつ！？」

「落ち着いてください、これはマスターである証の令呪です」

「れいじゅ……？」

「はい、では氣を取り直し、 サーヴァント、セイバー、召喚に従い参上した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに、契約は完了した。」

キン、と手の甲の痕が輝く。

「しょーかん…けーやく？」

「はい、貴方は私を呼び出したマスターの一人です。その令呪がマスターの証なのです。」

「ますたー……でも、おれはおねえさんのことよんでないよ。ゆかがピカツーとしたらおねえさんが居たんだよ」

「それでも私は貴方のサーヴァントとしてここにいる、だから私のマスターは貴方だ。」

納得できないのか頬を膨らませる少年にセイバーは困ったように笑う。

「わかつた、おれがおねえさん……じゃなかつた、セイバーさんのますたーになるよ、でもますたーとかあなたじゃなくて士郎つてよんでもほしいな」

「シロウ……わかりました、よろしくお願ひいたしますね。」

うふと頬を赤らめて頷く士郎にセイバーも自然と微笑んでいた。

おねがせなせ、おなれやーばなぶ。(後書き)

七歳の従弟が戦い＝ケンカと言っていたのを想い出して、ちよつと
借りました。

子供にとっては戦争は喧嘩の一種だと思つてこらのかな…

あべやくわそひよひー……なの?

「えつと、……セイバー、さん?」

「私のことはセイバーでいいですよシロウ。……何か聞きたいことでも?」

「うん、あのね……えつと、また一つてなにすればいいの?」

「サー・ヴァントに命令すればいいのですよ」

「セー・ばんと……青いお兄さんも言つていただけ?セー・ばんとつてなに?」

「サー・ヴァントとは、」

突然、ハツとし辺りを見回すセイバーに士郎はどうしたの?と問おうがセイバーはキッと屋敷の塀を睨み付ける。

「シロウ、外に新たなサー・ヴァントが来ます、貴方は屋敷内に居てください。」

「え、セイバー?」

心配げな声で見上げる士郎を余所にセイバーは一気に塀まで走り、塀を乗り越えつて行つた。

一人になってしまった士郎は、再び不安になり胸元を握りしめるセイバーは屋敷内に居ると言つていたが今の士郎には頼れるのはただ一人だけ、……結果は予想通り、門まで裸足のまま駆ける士郎。

「セイバー!」

「なつ……!?」

敵マスターに追い討ちをかけるように自身の武器を突きつけていた

セイバーだが背後の声に振り返れば、自身のマスターである士郎が息をきらしている。

「シロウ……！」

敵マスターなどそっちのけで士郎に駆け寄りどうして来たのか聞けば、黙つたまま振るえる手でセイバーの手を握る。

「『じめんなさい、でも……』

一人にしないで、と言つてゐるかのように振るえて涙目で見上げてくれる士郎に垂れた耳と尾の幻覚が見え、不意ながらキュンとしてしまつ自分に首をふる。

「セイバー、あの人たち……」

「…」

しまつたと士郎を後ろに隠し、放り出した敵マスターに武器を構える。

言つまでもないが敵マスターは不機嫌に腕を組んでいたがフンッと鼻で笑う。

「まさか、衛宮くんがマスターだな、……あれつ？」

敵マスターは着てゐる赤いコートと反面に真つ青になり上げていた口角を歪め信じられないモノを見るかのようにセイバーの後ろに隠れている士郎に思いつき首をかしげると屋敷と士郎を何度も見返し唸る。

そんな中、ねえ、とセイバーの着てゐるドレスの裾辺りを引く士郎にセイバーはなんでしょうかと聞く。

「赤いおねえさん、だれっ？」

敵マスターは士郎を知っている様子だが、身に覚えのない人に困った様に眉を下がつた士郎にセイバーは暫し悩んだ。

この純真なマスターに現状を捻つて言えば場が悪くなる可能性があり。

サー・ヴァントのマスターで戦闘の途中と言えば、ランサーのとき同様で「ケンカダメッ！」と前に出られては困る。

セイバーは悩んだ末に……

「シロウ、あれは敵ですよ。」

直球に言えば士郎は首をかしげる。

「てき？」

「はい、敵です。」

「てき……」

士郎の脳内に浮かんだ敵のイメージは、黒い身体に一本の角、胸に紫ボタン、矢印の様な尻尾、ギザギザ歯、背中にハエ羽で赤くつて空を飛ぶ顔がパンが宿敵な去り際に「ババイキーン！」と言つ国民的アニメキャラが浮かんだ。

ちつ、ちつ、ちつ、……ちーん。

「わるいやつなんだね。」

「はい、悪です。」

「赤いから赤いワルモンだね。」

「はい、赤い悪魔です。」

「誰が悪者じやうじやうーーー。」

乙女……とは程遠い雄叫びが月夜に響いた。

あべやべれとヒヅムハー…なの~ (後書き)

今回も短いです。

悪者から連想するものを考え、行きついたのはあのアニメのキャラになりました。

みんな大好きの「ハ~ヒフ~ヘホー!」の子です。

まあ、いちよあの人ほこの回だけ「ワルモノ」キャラです。

おはなししまじゅう。

チツ チツ チツ

時計の秒針が暗黙の居間に鳴り響く、その部屋には男が一人、女が一人、子供が一人……それぞれ違う表情を浮かべている。

男は複雑そうな…微妙な顔をし、黒髪の少女は頭を抱え唸り続けい、金髪の少女は前に座っている男女を警戒している、子供の方は困惑したように三人の顔を見回している。

「誰が悪者じや！」「あーーー！」

「ふえつーーー！」

ビクッと肩を跳ね上がる士郎はセイバーの後ろにサツと隠れる。

我に返り、金髪の少女の背後で振るえる子供に流石に焦り、戸惑つた。

「えつと、『めんなさい衛宮君、でいいのかしり?』

「……そつだよ、おれが、えみやだけど……でも、」

キュッと裾を掴む手を放し、数歩前に出ると困ったよつと眉をハの字にして胸元に手をやる。

「おれ、赤いおねえさんのこと知らないよ……今が、はじめまし

てだよ。」

言い切る前にサツとセイバーの背後に隠れる士郎に凛はなつ、と固まってしまう。

それを見た士郎はセイバーの裾を引く。

「セイバー、おれなんか悪いこと言つたかな?」

「いえ、そんなことはありませんよ。」

ふわりと微笑むセイバーに士郎はそっかと安心をした。

「こらー！そこつー和むなつー！」

シャー、と逆毛をたてた猫のように怒りだす少女。だがそんな少女の肩をつかむ者がいた

「凛、落ち着くんだ。」

「アーチャー……」

少女の肩をつかんだのは褐色の肌に白髪の変わった服装の男だ。突然現れた男に士郎は、驚き無意識に裾を握りしめるとセイバーが大丈夫ですと言い聞かすどうん、と頷く。

「凛、一度落ち着くんだ。」

「わ、わかつてゐわよ……ちよつと現状が把握できなくなつて」

「ふむ、……」

チラリと士郎を見る男、すかさずセイバーが背後に隠す。男は少し考え少女に声をかける。

「凛、任せてくれないか。」

「え、でもアンタ負傷して……」

「戦いはしない、少し話がしたいだけだ……凛もあの子供が気に入るんだろう?」

「……わかった、任せる。」

少女は一步下がると男はセイバーと向き合つた。

だが、田線は若干下向きで、背後にいる士郎を見ている。

「ところでお君。」

「ふえ、……おれ?」

「ああ、君にひとつ聞きたいんだが……もしや、それ一枚しか着てないのか」

「へつ?」

首をかしげ、着ている服を見る。

「……くしゅん。」

タイミングよく、士郎はくしゃみをした。

そう、現在士郎の着衣はブカブカのシャツ（胸元穴あき）一枚。もちろん、ノーパンだ。

「そこでだ、……」これは一時休戦し……そうだな、君の家に入れてもらえないだろ?」

「なんだと?」

「君も自身のマスターがこんな寒空の下で寒々としてかつこつこつしているんだ、風邪でも引かれては君が困るだろ?」

「う、……しかし」

「セイバー」

「シロウ？」

「えっと、あの人もさーばんとなの？」

「はい、そうですよ」

「そつか……あの赤いお兄さん、いちじきゅーせんつて、よくわか
んないけど、ケンカしないってこと？」

「喧嘩？……ああ、少し話がしたいんだ、だから場を移したいんだ。

「…………セイバー、あの人たち、家に入れていい？」

「それは、マスターであるシロウが決めることですよ。しかし、よ
ろしいのですか」

「うん、音ならなかつたから大丈夫だよ。」

いいでしょ、と聞いてくる士郎にセイバーはわかりましたと答える。

そして、今にあたる。

居間は沈黙が続き、机に置かれた湯飲み（士郎が茶つぱを入れ、男
が湯を入れて湯飲みに入れた。）が湯気をたてていた。

ねまなししおり。 (後書き)

み、短い…！

そして、進まない話の内容。

意外と本編通りに進めるか難しいです。

次回、赤主従にたくさん喋つてもらいます。

そして、今更ながら「子シロウつてシャツ一枚じゃねえかっ！？」

つと気づき、そこらへんを追加しました。

次回辺りから衣装チエングしとかないと…

番外編 ばれたでー。 (前書き)

この話は聖杯戦争後設定です。

注意書き

- 1・子シロウは、凛と桜を「姉さん」と呼んでいます。
- 2・アーチャーがちょっとですが父性に目覚めています。
- 3・既に良し。

OKな「ひじり」や。

番外編 ばれたでー。

「はー、シロ君」

「？」

八百屋のおかみさんに手渡されたのは、手のひらに乗る正方形の小さな包み。

それを受け取った士郎は首をかしげた。

「セイバー、リン姉さん、サクラ姉さん、イリヤ姉さん、ライダー！」

お使いに行っていた士郎があわてて帰ってきた。
片手にはお使いの品であるキャベツが入った袋。
どうかしたのか慌てる女性陣に対し士郎はあのね、と口を開く。

「今日、ばれたんで なの？」

「……はっ？」

「バレた？」

「何がバレた日なんですか？」

「変わった日本の行事ですか？」

田を点にする姉妹と首をかしげるイリヤと話すセイバーとライダー

「士郎、もしかしてバレンタインのこと？」

「そうつ！あのね、やおやさんのおばさんがチヨコくれたんだ、なん
でくれたのか聞いたらね、今日はばれたんデーでいつもお世話に
なっている人にチヨコあげる日だって言ってたんだ。」

「ほう、チヨ」をですか。」

「うん、でもね……おれ、みんなにあげるチラチラの金ないつて、

買えなか二
たんた

シウン、と幻覚の耳が垂れたように落ち込む土郎にキュンときたセイバーは主を抱きしめる。

「シロウ、貴方のその気持ちだけで十分ですよ。」「セイバー、苦しいよ」

美しき主従愛が続き、やつと士郎が解放されるとあつ、と何かを思
いだして凜らに向かつてあのね、と言ひ。

「帰り道にランさんに会つて教えてもらつたんだ、あのね」

「アーティスト」

満面の笑みを浮かべ両手でハートをつくる土郎。

ドサツ

「さや
！桜つ、桜
！」

一衛生兵！誰か衛生兵をつくる！

「先輩のラブ、先輩のラブ……うふふかわいいです……」

慌てる姉と従者と幸せそうに倒れる妹、若干だが赤いものが見えた

「？サクラ姉さんどうしたの？」

「大丈夫よ、いつものことだから」

「シロウは気にしなくて大丈夫ですよ。」

セイバーに抱き抱えられイリヤの持参した洋菓子を受け取った土郎はそうなの？と首をかしげた。

34

「土郎、一つ聞きたいのだが。」「なに、アチャ兄」「……この花はどうしたんだ？」
「あ、あのね、帰つてくる途中にランさんに会つて、アチャ兄になにか送りたいって言つたらこれをやればいいっててくれたんだつ……もしかして、お花…嫌い？」
「いや、そんなことはない……ありがとう。大事にするよ。」「えへへ」

頭を撫でられ嬉しそうな土郎に、つられて微笑むすっかり父性（母性？）に田覚めた褐色肌の弓兵は内心、あの駄犬殺す。と決めていた。

番外編 ばれたでー。（後書き）

子シロウが貰つたのはチルチョコです。

アチャガ貰つたのはカーネーションです（笑）

きつと、ドライフラワーにして取つとべと想つ。アチャだし。

あ、ランさんとは槍のことです。

ねむなし声づかひ。 その2

無言の圧迫感と長い沈黙に耐えられなかつたのは士郎は恐る恐る口を開く。

「あの、」

六つの瞳が士郎を見る。

ビクッと肩が跳ね上がるが、おずおずと口を開く

「あの、その……赤いおねえさん」

「…………凜よ」

「へつ？」

「私の名前、遠坂凜…………よひしへね。」

「とーさか、りん……うん、わかつた、リンさんだね…………よひしへお願いします。」

「…………それで、一つ聞きたいことがあるんだけど」

「え、……なに？」

首を傾げる士郎に凜は言ひにやうに聞いかけた。

「貴方、わつき私は初めて会つたつて言つたわよね。」

「うん」

「…………一様、聞くけど貴方、今何歳？」

「えつと……たぶん七歳。」

「なつ……！？」

凜の隣の男が驚愕で声を漏らすが、何でもないと視線を逸らす。

「そう、なの……衛宮君、落ち着いて聞いてくれる?」「リンさん?」

「信じられないかもしないけど……貴方、私と同じ年なのよ。」「えつ? おないどし?」「えつ? おないどし?」

「貴方、ほんとは17歳で私と同じ高校に通っていたの」「えつ? えつ? おれとリンさんは同じとしてどう引きゆつせい?」「ええ」「ええ」「えつ!」「えつ! ！」

「そうなの? と混乱した士郎、苦い顔をした凛、驚愕の事実を知ったセイバーは凛に問いかけた。

「リン、もしやと思いますが、シロウのこの姿になつた事で何か知つてますね」「うう」

ジト目で睨むセイバーと不安そうな士郎……凛は重い口を開く。

「実は……衛宮君は私達と対峙していた青い鎧のサーヴァントに襲われたの。」

「青いよろこえつと……ランさんのこと?」

「ラン、さん?」「

「恐らくリンサーの事でしょ?」

「あ、なるほど。それで衛宮君は襲われて瀕死の状態だったの」「ひんし……?」

「死にかけ、て事。それを見つけた私が蘇生の魔術を使ったの」「そせい?」「

「生き返らせる事。よ……それで私たちはその場を離れたんだけど……」

「その時の、何らかの誤差で、その……多分、私のせい

です。」

すみません、と頃垂れる凜に士郎は首を傾げる。

「「ひ？コンさん、ワルい」としたのか？」

「どうやら、その様ですね。」

「やつぱり、赤いワルモノなんだ。」

「赤い悪魔ですね。」

「違うわあ ！！」

ウガッ、と卓袱台返しそうな行きよこで唸る凜。

「それから一様、聞きたいんだけど、何か覚えている事ある？」

「鮮麗に覚えている事とか？」

「え、…………あ、……」

「シロウ？」

突然俯いた士郎だが、直ぐに頭を上げる。

「おれがじいさんに引き取られた」とかな、一番に覚えているの。
「えつ？」

頭を上げた士郎は淡々とした口で答えた。
しかし、その目は薄暗い闇が浮かんでいる。

「前におつきな火災があつて、そのときにおれ、家族とかよく思い出せなくつて、病院にいた時にじいさんが来て、おれをよーし子にしたんだ。その時に……じいさんが言つていたんだけど、今日から君はボクの子で衛宮士郎つて名乗るんだよ、て言つてた。……今は

「そのへりこしか今は、思い出せない」

「ごめんなさい」とショーンとした土郎、その瞳には闇はなかった。
落ち込む土郎にセイバーは頭を撫でた。

「それじゃ、衛宮君はその人に引き取られてからの記憶しか思い出せないので？」

「うん、でも引き取られた後のちょっととの間くらいの事は思い出せるよ。」

「わう、……それにしても、驚いたわ……まさか衛宮君がセイバーを喚び出してしまったなんて」

「え？…違つよ、よんでもないよ、ゆかが光つてセイバーが居たんだよ。」

「はッ？…何それ、セイバー…本当なの？」

「はい、確かに私は参上しましたが、シロウは喚んでいないと申しています……しかし、シロウは令呪を持っていましたので、形はどうあれは私はシロウのサーヴァントでシロウは私のマスターであります。」

胸に手をあて、土郎の肩に手を回し微笑むセイバーに土郎もうん、
と笑い微笑ましい雰囲気になるがハツとした土郎はセイバーの膝に
手をおぐ。

「そうだつ！セイバー、セーバンとつて何つ？話きていてないよ。」

「あら、それなら私から説明しまじょつか？」

凜の言葉に土郎は本当にと首を傾げる。

セイバーはムツとしたように眉をひそめる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5059p/>

ちびっ子士郎の聖杯戦争。

2011年8月1日23時01分発行